



8種類のプレイで

性知識のないあの子を雌に育てる♥

基本CG8枚差分89枚!

無知な女の子に
性の喜びを与える

「3代目コウテイペンギンとして、私に足りないもの・・・？それを教えてくれるのか？」

「ああ、本当の自分を出し切れしていないな」

ペ。パ。プ。ライ。ブ。を。見。て。オ。レ。は。わ。か。っ。た。

揺。れ。る。胸。へ。の。視。線。に、
僅。か。な。が。ら。興。奮。し。て。い。た。こ。と。

こ。い。つ。は。弄。ら。れ。る。と。悦。ぶ。雌。
な。ら。ば。そ。れ。を。教。え。て。や。る。の。だ。

雄。と。し。て。の。役。目。と。い。う。や。つ。だ。





「な、何をやる？」

「大丈夫、楽しんで。」

「まずはマッサージで体から

不必要なモノを出してしまおう」

「そつとコウテイの足に触れ、優しく揉んでいく。」

「ふう・ん・ん・ん」

「気持ちいいかい？」

「わからない・ん・ん・ん・ん」

「そうか、じゃあ少し強めにするよ」

「少し肉の形が変化するほどに力を込める。」

「んっ・んっ・んっ！」

「よしよし、効いてるね」

「じつとりと汗ばみ、雌の匂いをさせてきた
コウテイの太ももを、ねつとりと舌で舐める。」



余つむに肉を摘む。
非常に心地よい感触。

「アイドルにしては、少し太いんじゃないか？」

「少し吸い取っておこう」
「じゅぶじゅるじゅぼぼぼ」

「やあっ・・・！はあん！」
痕が残るくらい強く吸うと、腰が少し跳ねる。

「な・こ・れ・け・ど・気持ちはいい・・・？」

（よしよし・・・感じてきたな）
火照り始めているコウテイの体を、
もう少し上へと移動する。大きな2つの膨らみが、
それぞれ出っ張り主張しつつ待ち構えている。



じゆううううううううう。

頂きに着いたと同時に、

それに激しく吸い付いた。

「きやああ！あ、あ、あ、あ！」

「なに．．．これ？頭が．．．体が．．．」

「効いてるみたいだな」

「勃起したコウテイの乳首をしゃぶりながら、

コウテイに説明をする。

「体が熱くなってるなら、

「マッサージは効いているぞ。」

「あ．．．体の．．．おく．．．あつい．．．んっ！」

「このどこが一番熱い？」

「ここお．．．はひい！ここが．．．あ．．．あついー！」

股間を押さえながらコウテイが鳴く。



「ここか・・・よしよし」

コウテイの押さえる手をどかし、
下腹部から股間へと、舐めながら揉みしだく。

「あぁっ！はぁっ！はぁっ！」

じゅるる、ぺろれる。はぁっ！じゅうううう。

「ひっ！あぁっ！はぁん！」

こちらの愛撫に敏感に反応するコウテイ。
未知の快感に抗う術を知らない雌。

「気持ちいいか？」

「はぁん！・・・わからな・・・いい・・・」

「体が火照って、頭が真っ白になっていく。」

「これもお気持ちいいことだ。」

「あぁん・・・これもお気持ちいい・・・いい・・・」



ぐりゆう！

「ひぐう！」

コウテイのおまんこに触れた途端、
コウテイの腰が大きく跳ねた。

「はあっ！ ああん！」

ゆっくり優しく、それでいてしつこくねちっこく
おまんこを刺激し続ける。

「おまんこおまんこというんだ」

「ここは大事な場所だ。オレ以外に触らせるんじゃないぞ。」

「おまんこおまんこおまんこ。すごい。気持ちいい！」

「はいいい！」

「びくんと体を快感に震わせながら、返事をする。」

「何か。何か出ます！」



じよろじよろじよろ...

「や・や・や・あ・あ」

コウテイのおまんこから、
大量のおしっこが溢れ出す。

「は・あ・あ・あ・あ・あ」

「気持ちいいか？」

「こ・こ・こ・これ」

「あ・あ・あ・気持ちいい」

「見られながらするのが気持ちいいのか？」

「はい！気持ちいいです」

何度も確認し、気持ちいいと脳に刷り込んでいく。



「あぁ……気持ちいい……」
「ぎゆうっ！」
「コウテイは、朦朧とした表情で排泄を続ける。」

「ひぐう！」
「唐突に乳首を攻める。」
「これにも気持ちいいな。」
「はい！気持ちいいです！」
「オレに任せれば、こんな風になりますよ、立派なコウテイペンギンになれるんだ」
「はひ……はひ……」



「気持ちいいの・・・好き・・・」

「よし今日はこれで終わりだ」

「はい・・・」
コウテイは、名残惜しそうにこちらを見る。
いきなりちんこをぶち込んでもいいが、
もう少し楽しんでからにしよう。

「明日また同じ時間にここにおいで」
「はい・・・お願いします・・・」

つづく



—翌日—

「これ……本当にアイドルに必要なことなのか？」

一日経って、少し冷静さを取り戻してしまっただが、少し赤く染まった頬と、物欲しそうな瞳が、

嫌ならやめておくか？」

「や……それ……は……」

（やはり一度覚えたい快感は忘れられない）

「どうして欲しいかちゃんと言ったんだ」

「あ……あ……」



「マッサージ……してほしい」

「……それだけか？」

「!……気持ちよくして……欲しいです」

主従関係ははつきりさせておかないといけない。

「どこを触って欲しい？」

「あ……あの……おまんこを……」

「ダメだ、疑った罰だ」

「そ……そんな……」

コウテイのいやらしく主張する突起に手を伸ばす。



ぎゅううっ！

「ひぎいっ！」

千切れそうな程、強い力でコウテイの敏感な乳首をつねる。

「痛い・痛い！」

少し力を緩め、コリコリとした感触を弄ぶ。

（痛がつついていても乳首を固くさせているな）

「はあっ・はあっ・はあっ・はあっ」

息を荒げながら、コウテイはこちらを見つめる。

ぎゅううっ！

また強めに引っ張り、ぱっと手を離す。



「あああつ……！」

「ぱちんつと音がかなりそうなほど、コウテイのおっぱいは勢い良く戻り、僅かな揺れを経由し元の形へと戻る。ぱいは痛かったか？」

「……うん」

「本当に痛いだけだったか？」

「……少し……気持ちいいも、あった……」

「正直でよろしい」
「痛みの中に性感を見いだせるな、よしよし」
「それじゃあご褒美をあげないとな」



「ひぎゆうっ！
再びぎゆうっ！と強く乳首を摘み、引っ張り上げる。

「はあっ……！ひぐう……っ！」

先ほどとは違い、愛撫によって性感を高められた乳首は、
痛みとともに強い快感をコウテイへと与える。

「どうだ？」

「きもちいいっ……ひぐうっ！気持ちいい！」

「よしよし、コウテイは本当に可愛いマゾだな」

「マ……ゾ……？ひぎい！」



「ひぎいいい！」
乳首をぐりつと捻り上げる。
「こういうことが気持ちいいって感じるやつをいうんだ」
「マゾ……んっ……まぞお……」
「そうだ、コウテイはマゾだ」
「引張った乳首を戻し、おっぱいを揉みしだき、また引張る。
それを繰り返すと、コウテイの目は虚ろになっていった。」
「あっ……ああ。気持ちいい……ひぐう……きもちいい……」
「マゾなの……いい……ひぐう……きもちいい……」

「気持ちいいの好きだろ？」
「はひ！きもひいいお……すき……ああつ！」
もつとお……か解らなくなっただか、コウテイは薄っすらと涙を
どうしていいの……ただただおねだりを繰り返した。
浮かべながら、……はあ……はあ……」





最後に乳首強く引っ張り、離す。

最後の大きな快感にコウテイは、ついに膝から崩れ座り込んでしまった。

「どうだった？」

「きもひ・・・よかつあ・・・」

「またして欲しいか？」

「はひ・・・」

「ならもうオレを疑うなよ」

「はひ・・・ごめんなさい・・・」

息も絶え絶えな様子の子の視線は、宙を漂っていた。

つづく



「翌日」

「こう？」

コウテイは、その大きなお尻を
こちらに突き出し、確認を促した。

「いいぞ」

「今日は気持ちいい、
マッサージしてくれるの？」

「もちろんだ」

喜びを隠せないコウテイの大きな肉付きのいいおしりが、
ゆっくりと左右に揺れる。





「ひぐう！」
突然の痛み、コウテイは思わず声をあげた。
赤くなつたコウテイの大きなお尻を
優しく撫でながら揉む。

「どうだ？」
「ひりひりするのど、
「ふむ」
「ゾワゾワするのが一緒に、」
「もう一度、ゆっくりと腕を振り上げ、」





「あひいんっ！」

一発目よりも、熱のこもった声を漏らす。

「はあ・・・きもちいい・・・」

コウテイは小刻みに震えながら、

吐息混じりに呟く。

(乳首開発下後だからか、感じるのが早いな)

やさしく大きなお尻を撫で回していると、

コウテイは物欲しそうにこちらを見つめた。

「もう一回・・・強い・・・ほしい」

「そうかそうか」

オレは先程より少し大きく振りかぶり・・・





周囲に響くほどの強さで、
コウテイの肉厚なお尻を叩いた。

「あぐううう！」
痛みに涙をうつつすらと浮かべながらも、
真っ赤になっただお尻を震わせている。
「きもちいい……もっとい……ほしい……」
痛みと快感から強い性感を得ているようだ。
コウテイは、感じながらもおねだりをやめない。



「お願いします。おしりも叩いてください。真っ赤に腫れ上がった尻を、こちらに突き出し、コウテイはさらなる刺激を求めてきました。」「まったく。コウテイはマゾアイドルです！」

「はいいっ！コウテイはマゾアイドルです！」

「知らないうちには敬語にのろっているか。」「本能がそうさせているのだから、赤い卑猥なデカ尻めかけて、オレは大きく腕を振り上げた。」「力いっぱい叩きつけた。」





「あひいいいっ！」
連続した痛みとそれに伴い
発生する強烈な快感。

「あひ・・・ひぐう・・・」
「おまんこを覆う布が
シミを作り出す。

「ケツを叩かれてイッたのか？」

「頭が真っ白になるほどの気持ちいいだ」

「これが・・・イク・・・きもち・・・いい・・・」

「徐々に知識と性感を覚えていくコウテイ。
「ありがとう・・・ございまひた・・・」

余りの快感と
薄れ行く意識の中で緩んだのか、
コウテイの肛門は
とても卑猥な音を響かせた。
「あひっ」
音と同時にコウテイは
大きなお尻を震わせる。

(こっちの穴も使えそうだな)

うひゃ



「今日は何をするの？」
目の前にしやがませたコウテイは、
期待を隠せない様子でこちらを見上げてくる。
すっかり従順になった。





ぼろん。
コウテイの目の前に、おちんぽを曝け出した。
「ご主人様は、前に尻尾があるけものなの？」
「いやこれはおちんぽついでいうものだ」
「おちんぽ」
「ほら、舐めてごらん」
「う、うん」



「はあむ。ぺろぺろれるれる」
コウテイは言われるがまま、
目の前の男性器を舐め始める。
「歯は立てるなよ」
「ふあい。こえ。あんまひおいひくないひ、
変なにほいするね」
おちんぽを唾えたまま、コウテイはもごもご喋る。



「嫌いか？」
「ひらいじやないへど……」
「なんは……へんは……」
「コウテイは舐め続けながらも、股間をもじもじさせる。
本能的におまんこに入れるものだとすることを
理解しているようだ。これは触ってはいけないう言いつけを
だが自分でもおまんこを触っているのか、
しっかりと守っているのか、
うずくおまんこを触ろうとはしない。」



「はあむ……ぺるぺる……何か……出てきた？」
刺激を受け続けた男性器は、先端から透明な汁を出した。
「ああ、それも飲みながら舐めてくれ」

「ふあい」
今までの舐める・啜えるに吸い付くという
新たな刺激が加わる。

「いいぞ」
コウテイの頭を撫でながら、行為を褒める。

「これは後々お前を気持ちよくしてくれるからな」
「ふあい……ぺるぺるじゅるう……」

自分を気持ちよくすると聞いた途端、
しゃぶりつくように刺激を与えるようになった。

「ふえ？」
「……だすぞ！」

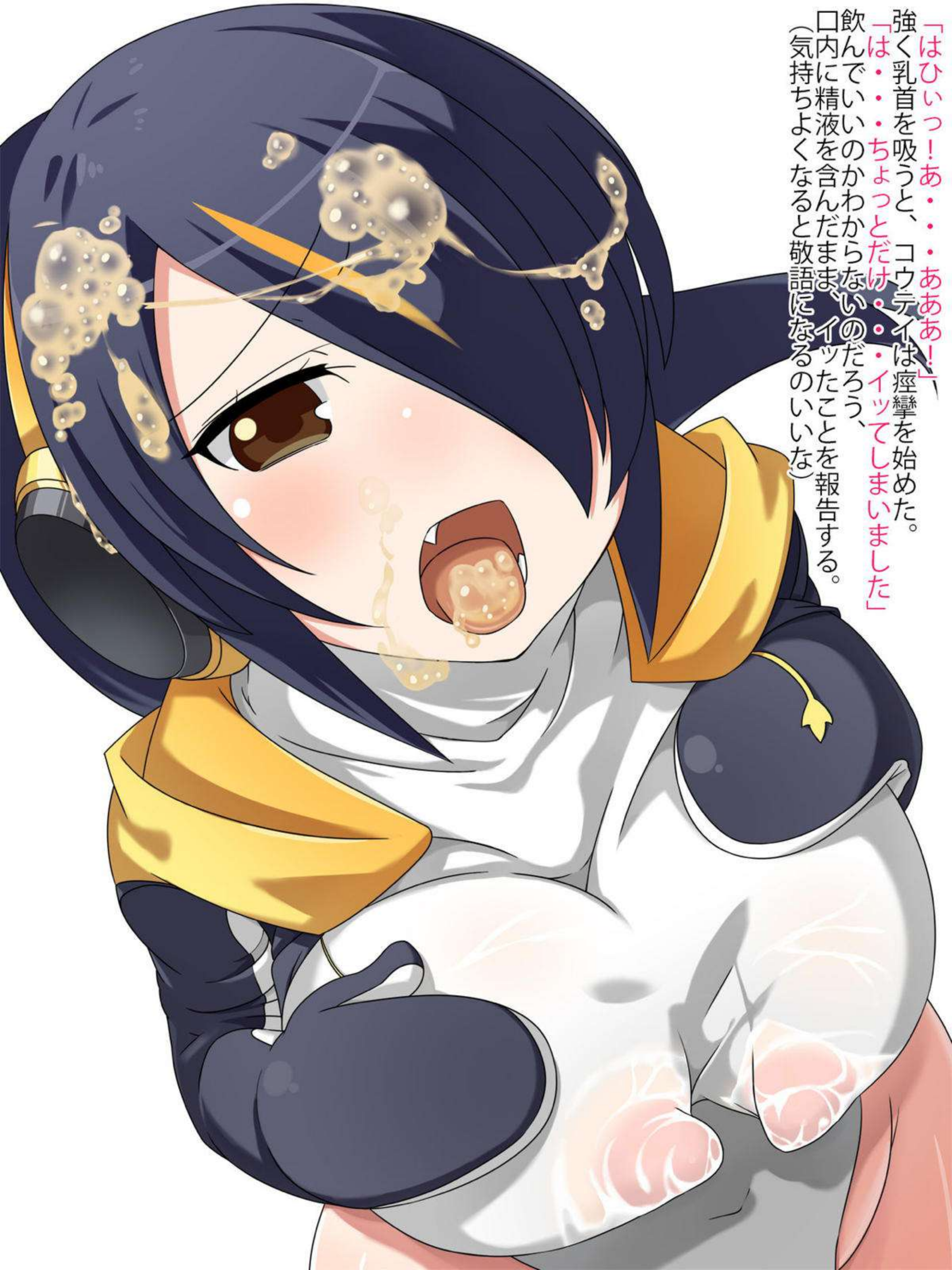


びゆるるるるるるるるるるるる！

「きやあ！」
刺激を受け続けた男性器は、その溜め込んだ精を解き放った。
「なに？なに？あつうい！」
びゆるるびゆるると勢い良く出るザーメンは、
コウテイの髪や顔、口を汚していく。



戸惑うコウテイの乳首を摘み、しゃぶり始める。
じゆるじゆるちゆううう。
「ひゃあん!はひい!」
おちんぽを舐め続けた事により興奮していたのか、
すでに乳首がコリコリに勃起していた。



「はひいっ! あ・・・ あああ!」
強く乳首を吸うと、コウテイは痙攣を始めた。
「は・・・ちよつとだけ・・・ イッてしまいました」
飲んでいいのかわからないのだろう、
口内に精液を含んだまま、イッたことを報告する。
(気持ちよくなると敬語になるのいいな)

「今度は胸に挟みながら舐めてくれ」
「はひい」
精液の残る口内に、亀頭が押し込まれる。
「はぶう……じゆるじゆるべろべろ」
コウテイの豊満なおっぱいのやわらかな感触と、
大きく勃起した乳首のゴリゴリした刺激が加わる。
「ふんぐつ……ごくん。ふあむう」
押し込まれ、
口内に残っていた精子を飲み込む。



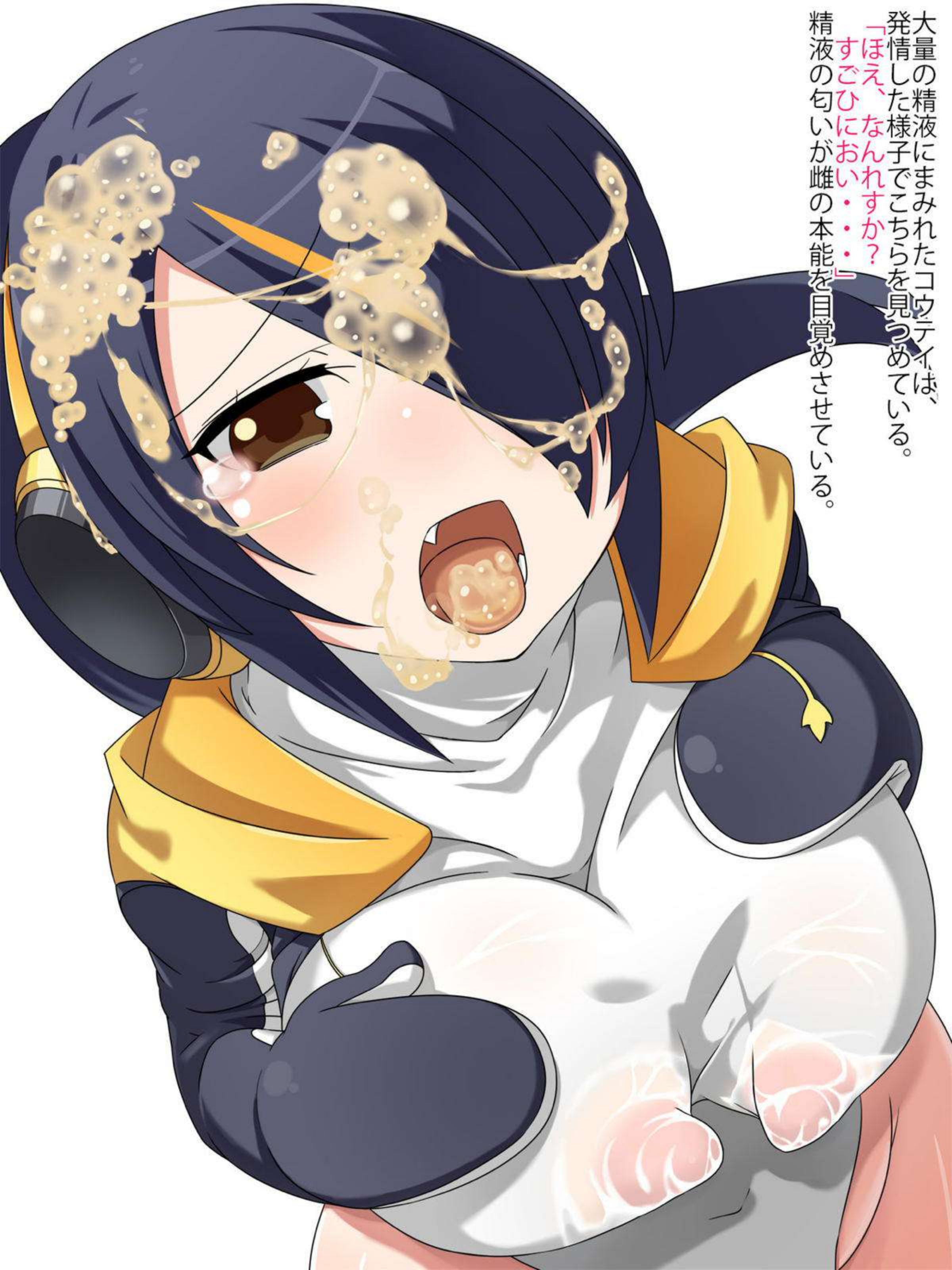


「まはおひるでへひまひた」
口いつぱいにおちんぽを含みながら、
我慢汁が溢れてきたことを告げてくる。
「ふあいぞ、もつと吸ってくれ」
先っぽが喉に当たると、
「おぐつえほつえほつ」
喉への絡みつく精液と、
苦戦しながらも、
コウテイは必死にしゃぶりついた。
2度目の射精が近づく。

「じゅるるるるるる」
「じゅるるるるるる」
亀頭の物理的な刺激に



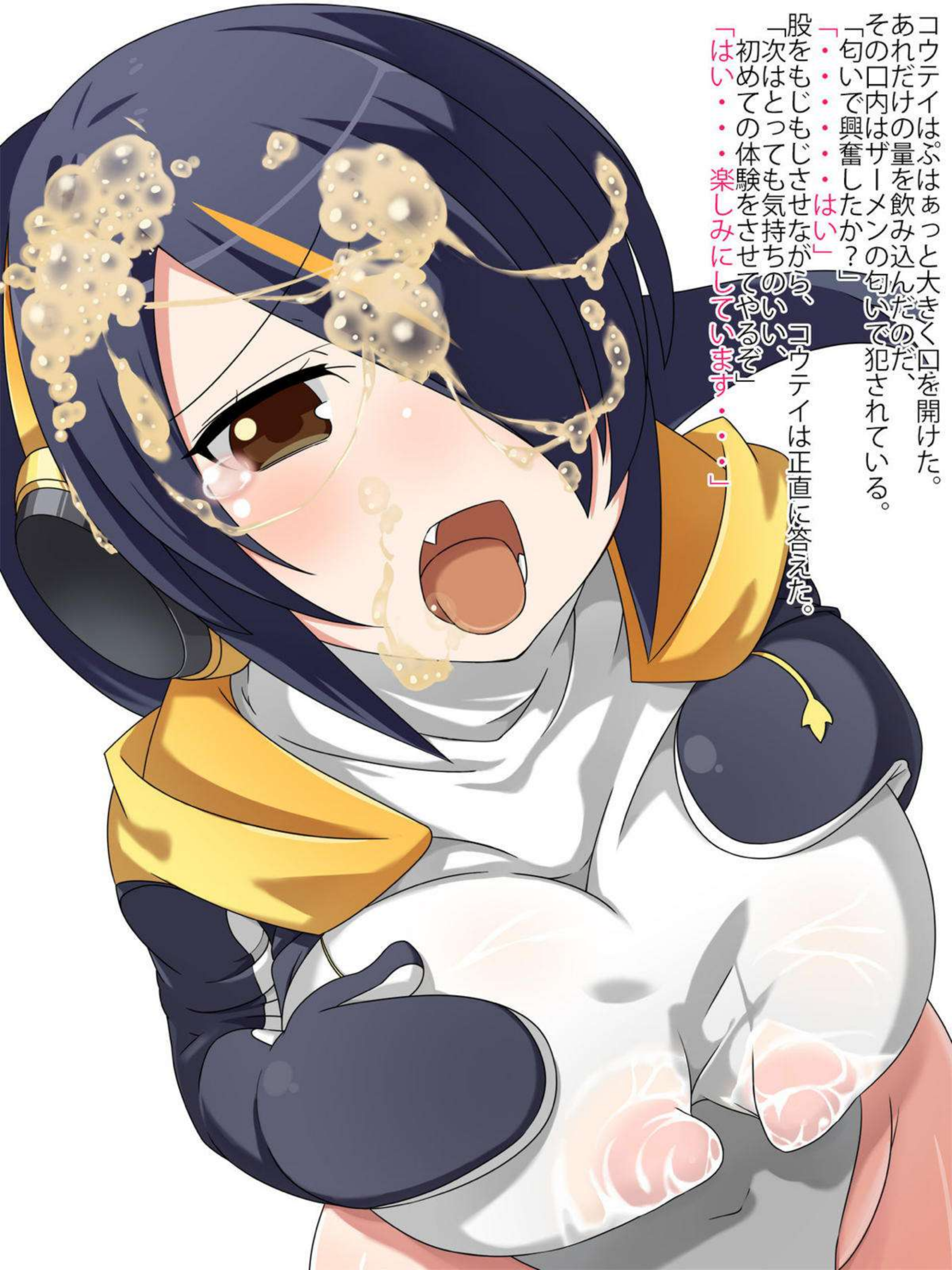
びゅぐう！びゆるびゆるbbyる!!
「きゃああ！」
必死にしゃぶりついてたコウテイ目掛けて、
欲望のまま精液をぶちまける。
「あああ、あああ。」
出てます、熱いのいつぱい出てます!」



大量の精液にまみれたコウテイは、
発情した様子でこちらを見つめている。
「ほえ、なにおんれすか？」
精液の匂いが雌の本能を目覚めさせている。



「精液だ。よく噛んで飲め」
「ふあい」
ぐちやぐちやと噛む仕草を見せてから、
口内に溜まった大量の精液を飲み込む。
「おいひくない」
「慣れたら美味しく飲めるよ」
「ほんとうですか？」



コウテイはふはあつと大きく口を開けた。

あれだけの量を飲み込んだのだ、犯されている。

「その口内は興奮したか？」

「股をもじもじさせながら、コウテイは正直に答えた。

「次はとつても気持ちいの、やいぞ」

「初めでの体験をさせてやるぞ」

「はい・・・楽しみ・・・に・・・して・・・います・・・」

「今日はなにをするの？」

前回、期待させるようなことを言ったせいか、コウテイの顔はいつになく期待に満ちている。

「マツサイジの最高系、セックスだ」

「せつくす？ それ気持ちいいの？」

「ああ、お互いに気持ちよくなれる」

「やるうやるう！」

セックスが何かもわかっていないコウテイは、無邪気に股を開き、男性器を受け入れる態勢を取る。



「セックスとは、コウテイのおまんこにオレのおちんぽを入れることだ」

「久しぶりのいいことしてくれませんか？ やった！」

期待が膨らむコウテイ。の刺激に、

「でも、触つちやダメって……言われてたから……」

「我慢してたという事が、偉いぞ」

すでに濡れており、視線を移すと、侵入を促すようにひくひくと動いている。





(これならいきなりぶち込んで大丈夫だな)
 股間を覆う生地をずらし、いきり勃ったおちんぽを
 コウテイのおまんこへとあてがう。

「ひゃん！」
 おまんこの入り口におちんぽが触れた瞬間、
 久しぶりの刺激と未知の快感への期待に、
 コウテイは思わず声を漏らした。
 「はやく...はやく...」
 「はやくぞ。力を抜けよ」
 「うん...」
 入り口は狭く、抵抗を拒むような締め込みを
 ぐっと力を込め、コウテイの体内への侵入を試みた。

ぶちぶちっじゅぶじゅぶじゅぶるー!

「ひぎいっ!」

処女膜を破ったおちんぽには、うっすらと血が付いた。

「大丈夫だ。いつも最初は痛いけど、うっすらと血が付いた。」

「うん。ひぎ。なつてたあ。!」

内壁は狭くきつかったが、大量に溢れていたコウテイの愛液の助けを借りて、ゆっくりとおちんぽを奥へと沈めていくことができた。一番奥の部屋へと先が辿り着いた。





「ああっ！ひぎい！」
「まだまだコウテイの中はきつかったが、
ゆつくりと出し入れすることで少しずつ馴染んでいった。
「はひい・・・あっ・・・あ・・・はあん！」
「声も熱を帯び、痛みが薄れやがて性感へと変わっていった。」
「どうだ？」

「気持ちいいです！」
「あぐう！はあはあ・・・あひい！」
「徐々に腰の動きが激しくなり、
コウテイの大きな肉厚のおしりへと叩きつけるようになっていった。」
「もつと・・・もつと・・・え・・・！」



じゅるじゅるじゅるじゅる!!

「あひい! あひい! きもちいいの!」

「いっぱい! あひい!」

「おまんのこのおねだりに応えるように、

大きなおっぱいを揉みしだき、乳首をしゃぶった。

「かひいっ! あっ! あっ!」

「徐々にゴウテイの喘ぎ声が言葉にならなくなってきた。

「ひぎます! ひぎます! ひっちやいますう!」

「ほら舌をだせ!」



言われるがままに舌を出したコウテイに、
覆いかぶさるようになり口を近づける。
「はあんっ! あひい! ん... ちゅっ... ちゅ...」

出した舌を甘噛すると、
「はあ... はあ... はあ... イクう... イツちやう」

「はいぞ、中に出してやるからな。盛大にいけ。」

「いひまう! いひまふう!」

急激に締め付けでくる膣内に、
遠慮なく全ての精液をぶち込んだ。



どぶつどぶつびよぐびゆぐびゆる！

大量の中出しと共にイッたコウテイは、
声にならない絶叫と共に体を大きく弓なりに反らせた。

「ふはあっ！はあはあ・あぐう！」

熱い・お腹熱い！

注がれ続ける精液はコウテイに入り切らず、

体外まで飛び散った。うう！また・またいつちやうう！

「激しい性感に襲われ、イキっぱなしになるコウテイ。」



ぶぽつ...
 精子を出し切ったおちんぽが、
 ゆっくりとコウテイのおまんこから抜かれた。
 「あひいん... はあはあ...」
 「これがセックスだ、どうだ」
 「こえ... すき... せつくすすきい...」
 「また... おねがいします...」
 コウテイのおまんこはひくついたり、
 行き場を失った精液の排出をしていた。
 「はあ... はあ...」
 初めての横たわった絶頂したコウテイは、
 そのまま横たわったまま眠りについた。

つづく

「今日もせつくすおねがいます」
すっかりセックスにハマってしまつたコウテイは、
お尻をこちらに向け、自ら股間がよく見えるように広げた。
「そうだな・・・」
そつとアナルを布越しに刺激する。



(よく見ると、布に尻穴の痕がついてるな)
布越しでもわかるほど、コウテイのアナルは吸い付きがよく、
そこが常に触れる部分の生地はうっすらと汚れていた。
「どれどれ」
ぐいっとコウテイの股間を覆う布を食い込ませる。



「きゃっ!」
布から受ける圧力が強くなり、その刺激に感じるコウテイ。
くいつくいつ。
「あん・あ・あ」
弱い刺激に、コウテイは感じながらも
もどかしそうな声をあげる。



「あの・・・せつくすは・・・?」
まともだった生地越しに美味しそうなアナルが見えるが、
まずは前からすることにした。
「いくぞ」
「はい!お願いします!」

ずぶうっ……。
「ひぐう……！きたあ……♡」
すっかりセックスに馴染んだコウテイのおまんこは、
ずっぽりとオレのおちんぽを啜え込んだ。
「あ……あ……！気持ちいい……！」
「すっかりおちんぽ大好きになっただな」



「はい！おちんぽお……だいすき……♡」
じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽう！
「ひぐう！もう……もうイッちやいます！」
……なかあ……中にせーし……くださいー！」
中出しの快感にハマってしまっただコウテイは、
こちらが聞くまでもなく膣内射精を求めてくる。



どぶどぶっ！びゆるびゆるびゆる！
「あああ！きたあ・・・！せーし・・・いっばい♥」
どくどくと男性器が脈打ち、
コウテイの膣内へと精液を送り込み続ける。
「いっばい！熱いの・・・いっばい」
種付けされる快感に、コウテイはお尻を震わせる。



ぬぽん。
おちんぽが抜けた後のおまんこからは、
後を追うように精液が溢れ出る。
「やあ・あ・あ・こぼれちゃう・あはあ」
上気した顔で息を切らしながら、
滴り落ちる精液を名残推しそっに見つめる。

「……」
「コウテイは物欲しそうにこちらを見つめる。」
「あの……もう一度……お願いできませんか」
「そうだな」
「やったあ」
嬉しそうに微笑むコウテイの、アナルへ指を入れる。



「きやうう!?!」
「しっかりほぐさないとな」
「コウテイは驚きはしたものの、
また未知の快感への期待がそれを塗り替えた。」
「こちらでも……できるんですか?」
「ああ」
「おねがいします! 気持ちいいの……すき……
マゾなコウテイは……せつくす……だいすき……」



ぶぼおっ！ぶぼおっ！

「アナルに空気が入り、それがおならのような音を立てて漏れ出す。」

「はあつ・・・なに・・・？なんのおと・・・？」

原因がわからないコウテイは不安がる。

「コウテイが、ケツの穴からアイドルとは思えないほど、

下品な音を鳴らしてるんだよ！」

「下品・・・やあ・・・いやあ・・・」

言葉とは裏腹に、下品と言われた途端、

アナルの締りが良くなつた。

「言葉にも反応するな、このマツは」

「はひいっ！ごめんさい！」

「はづぼっ！ぶびいぶぼお！」

「はぐう・・・！ひぐう・・・！」

「いっちやう・・・！きもちいい・・・！」

どぶぶっ！どぶぶぶぶびゅくびゅくっ！

「はうっうっ♡」

二度目とは思えないほど、濃く大量の精液が、コウテイのAnalへと注ぎ込まれる。
「あひい♡ひっ♡あぁあぁあぁ♡」

どくっどくっどくっとザーメンを注ぎ込むおちんぼの脈動に併せて、コウテイは絶頂を繰り返す。
「ひぐう♡おひり♡あつくて！！♡」
「きもちいいいい！！♡あつ♡！！♡」
まだ射精は終わらず、オレはコウテイの腰を掴み、更に激しく腰を打ち付け、Analの奥へと性器を突っ込んだ。
「はぐうっうっうっ♡！！」



「こわれまひゅ！おかひくなっひやいますう！
おひり♥あちゅくて♥きもちよすぎますう♥！
どくっびゅくっ！
さらに追加で行われる射精。コウテイのアナルに
収まりきらない精液が吹き出していく。
「ひい！もう・・・はいりませんっ！」

「あぐううう！」
最後に力づくで精一杯腰をおしつけ、
奥の奥まで性器で貫く。
そして一気に抜き去った。



「あひいいいいんっ♡！」
一気に入抜かれた性器にアナル内壁をこすられ、引っ張られ、
強い排泄感にも似た快感がコウテイを襲う。
「ひぎい・・・ひう・・・ひぐう・・・」
意識を朦朧とさせながらも、自らの性器とアナルから
溢れ出る精液を眺め、セックスの快樂の余韻に浸る。



大量の精液がコウテイの愛液と混ざり、
周囲に強い雄と雌の性交の匂いを充満させる。
「あひがとう・・・ございまひたあ・・・」
お尻を痙攣させ、おまんことアナルをひくつかせながらも、
コウテイはご主人への感謝を忘れない。

アナルから溢れ出る精液が薄い膜を作り、それをアナルの中に残っていた空気が出る際に破裂させる。

「すごい音だな」
「やあ・・・コウテイの・・・
アイドル失格の音・・・聴かないでえ・・・」

音が鳴る度、コウテイの尻が少し跳ねる。
アナルから出る下品な音を、
自分が出していることに興奮しているのだ。
「はひ・・・あ・・・あ・・・」

つづく





「ペパプライブ当日、
マッサーの成果、見てください」
と招待を受け、ただ見に来た。
見に来たわけではない。
秘策を施した。

「他のペンバに負けず目立てるよう、
ボディペインに負けないよう、
コウテイ今日いつもと違うな」

「コウテイ、そうかしら？」
「オーラがあるわね！」

「服を脱ぐと知らないケモノ達は、
当然ボディペインでいるものだ。
理解の範疇を超えているものだ。
だが変化には気付いているものだ。
注目をコウテイへ集めることができるのだ。」

「みんなー！いくわよー！」

ライブ開演。服を着ていないことで、コウテイのその豊満な肉体がいっつもより強調され、大きく揺れる。

客「なんかが……今日のコウテイすごくない？」

客「だよーね！……かつこい！」

（皆……私が私を見て……マツサーズの成果♡）

これが主人様のマツサーズの成果

早くも頬を紅潮させている。





ライブが進むに連れ、体に塗った絵の具が垂れ始めた。
「イワビィー」のおお？ コウテイなんかすげーな！
「コウテイ」あ……ありがとう……はあはあ」
興奮を性感に変え、少しずつ息が乱れ始めるコウテイ。
（きもちいい……きもちいい……）
遠くからでもわかるほど……
コウテイのおまんこは濡れていた。



「イワビ！」「おお・・・」
 「ライブ開始時とは全く異なる姿に変化していったコウテイに、
 メンバーや客の注目が集中する。」「あいがとお・・・」
 「ああ・・・はあ・・・」
 「きもひい・・・はあ・・・」
 「こんないきもひい・・・ライブラって・・・」
 「イワビ！」「おお・・・」
 「コウテイ見てるとなんかどきどきするな！」

そして興奮がとまらない。コウテイは、
新たな欲求が芽生え始める。
（おちんぽ・おちんぽ・おちんぽ
おちんぽ・おちんぽ・おちんぽ
ぐちよんぐちよんぐちよんぐちよん
あつうぱいせいぜい注がえきたい♡）
想像に乳首を痛そうなほど勃起させ、
腰を軽く痙攣させ
始めたかと思うと。。。。





ぷしゃあぁ！
ヨウテイのおまんこから、潮が吹き出す。
「イフビィーこうわ！ヨウテイそんなところから水出るのか!？」
「はあ。あ。あ。あ。ずぼずぼ
おひんぽで。あ。あ。あ。あ。ずぼずぼ
おまさんじされるの考えただけで、
おまんこ。あついの。あ。あ。あ。あ。
とまんこ。あついの。あ。あ。あ。あ。
だ。だいひょうぶうた。あ。あ。あ。あ。」
♡



断続的に潮を吹き出すコウテイの肉体から、
一ついに絵の具がなくなり、
糸まどわぬ姿がさらけ出された。
「あれ、コウテイつるつるだ。
どうやって取ったんだ？」
「はあはあ、またさあじい……」
「まっさあじい……」
「はやくう……おひんぽほひい」



「おちんぽ！
ご褒美のおちんぽ頂戴！」

ライブ後、あえて時間を置いてお預け状態にした。
その影響で発情状態が続き、欲求を抑えられなくなっていた。
コウテイは股を大きく広げ、おねだりを続ける。

「欲しいの！おちんぽ！
ご褒美のおちんぽ！
腰を振り、誘惑する動きまで加える。」





「これえ……」
「このおちんぽお……」
「よだれを垂らしながらも……」
「嫉された犬のように挿入を待つコウテイ。」
「まだあ……?」
「ねえ……まだあ……?」
「早く入れて欲しいよ……」
「もう少し待って……」
「はあい……おちんぽお……」





コウテイは腰を持ち上げ、
 おまんこにおちんぽをあてがい、
 ゆつくりと腰を沈めていく。ぼお...!
 じゅぶ・・・おちんぽはいつたあ...!
 「はぐう!」おちんぽは...
 コウテイのおまんこは待ち焦がれたおちんぽ、
 一気に根元まで飲み込んだ。あ...
 「おくち・・・はあ...」
 まきさあじきもひい・・・うびおひんぽ...
 「♡!」



ずぼっずぼっじゅぼじゅぼ！
 雄から精子の吸い出そうとする、
 雌としての本能のまま、
 コウテイはひたすらに腰を振り続ける。
 「せーえき・・・おひひい♡
 なかあ・・・おひんぽい♡
 おひんぽい・・・おひんぽい♡
 おくをあたついでいっぴゅっびゅうって出るの、
 コウテイすきいのでいっぴゅっびゅうにされるの・・・♡」



コウテイのギリギリした子宮口が
龟头の先に激しく吸い付く。

「ほいっ！ここにいっか」

コウテイはお腹をさすりながら、
膣内への射精を求める。

「はあっ・・・あぁん！
おねがいします・・・」

「コウテイの・・・
出してくっださい♥！」

射精の瞬間、コウテイの一番深いところまで、
性器を押し込み精を放つ。



どぶうびゆぐびゆぐびゆぐびゆぐびゆぐう！
 「ひぐうううう！きたあ・・・」
 コウテイのだいすきな・・・
 あついでい・えきい・・・
 膣内の深い箇所への射精に合わせ、
 コウテイは激しく腰を震わせ、
 膣内は精液を飲み干さんと伸縮を繰り返した。
 「イツてるう・・・！コウテイ、
 せーえき出されてイッてますう！
 きもちい・さ・あ・きもちい・のすき・
 おひんぽい・まっさ・あ・じだいすき・
 膣内射精を施され、何度も何度も絶頂を迎える。」



ぬほお・・・。
ぶしやあぁあぁ。
引き抜かれた男性器を追って、愛液と精液が溢れ出る。
「あ・・・あ・・・で・・・でっひゃうう・・・」
ぶびっぶびゅっとう卑猥な音を漏らし、
コウテイはその音にまた興奮を覚える。
「えっひなとお・・・
おきやくさんにお・・・聴かせちゃいけない・・・
えっちなおと・・・すきい・・・」
♥































































うんち

















